

コリントスの僭主政

芝 川 治

要 旨

従前、学説史においてギリシアの僭主政は二期に区分されてきた。そのうち所謂前期僭主は旧き貴族政の衰頹期に出現するとされ、それは平民の支持に倚りつつ、貴族勢力に打撃を加えたと唱えられてきた。これによってギリシアの社会、政治は転換を速め、民主政の勃興を呼んだというわけで、かくして僭主政は貴族政より民主政への過渡的政権と称されるのである。

かくの如き発展論的解釈であるが、それは妥当なのであろうか。本稿はそれをコリントスに関して検証するものである。キュプセロスの抬頭から、彼とその息ペリアンドロスの施策に至るまで、如上の学説を裏書するものがあるのだろうか。

キーワード…僭主政、コリントス、ペリアンドロス

序

ギリシアにおける僭主政は数多に上るのであるが、学説史においてそれらは標準的には二期に区分される。レギオンの僭主政が四六一年に解体された後、ディオニシオス一世がシュラクサイにて権力を奪取するのは四〇五年である。その間約半世紀、僭主の出現を見なかったという。それ以前が前期僭主、以降が後期のそれと称される。

所謂前期僭主としてその名を挙示されるのはコリントスのキュプセロス一統⁽¹⁾、ミレトスのトラシユプロス、シキエオンのクレイステネスなどオルタゴラス一門、アテナイのペイストラトスとヒッピアス、サモスのポリュクラテス、ゲラーシユラクサイのゲロン、ヒエロン等である。それらは大略遠からざる時期に簇出したという事で、その点、共通の原因を索めるのが至当とされる⁽²⁾。

この点においても清永昭次の諸論攷⁽³⁾は便宜を提供する。それらは通説を図式的に要約するからである。清永は「前期僭主」をギリシア史の進展の中に位置せしめる。ギリシアにおいては、当初、貴族支配体制が貫徹していたのであるが、それも頽勢に入るのを免れなかった。一つには戦術が変化した故という。貴族の一騎打ちから中流層を主軸となす重装歩兵戦術への移行が進捗した。これと共に商工業が一定程度成長し、所謂平民の抬頭を招致したという。更には貴族間の党争も相俟って、貴族支配の内包する弱点が徐々に顕在化した。かくして七世紀後半頃より、ギリシアのポリスは民主政への過渡期に入ったとの事である。貴族と平民との角逐の中、後者の支持に倚りつつ、多数のポリスにおいて僭主が興起した。平民は未だ自力にては政権を能く掌握し得なかったが、僭主の政策は貴族に打撃を加え、民衆の成長に資するものがあつた。政治的に覚醒した平民にとって今や僭主政は桎梏と化した。民衆は僭主を打倒する勢力に転じ、やがて自ら政治を担当するに至つた。それこそが民主政の樹立との事である。

このように、「前期僭主政」は貴族政から民主政へという例の如き発展論的構図の中に位置せしめられる事、瞭々たるものがある。古期における貴族政は衰弛の定めにあるというのであるが、僭主政はさなる動向を加速せしめ、新しき時代に途を開いた。その意味においてそれはギリシア史の構造変化を促進して一定の歴史的役割を演じた。その役割を果すと共に没落したというわけで、それは過渡的政権と評さ

れるのである。⁽⁴⁾

清水の叙するところかくの如きであるが、これは今日、多少の偏差を含みつつも、大多数の歴史家が分有するものである。それだけに、これは予断に基因するのではないかとの疑懼が胚胎するのである。貴族政から民主政へという伝統的理論に関しては、筆者は『ギリシア「貴族政」論⁽⁵⁾』において許多の疑念を呈しておいた。その点において如上の僭主政論は既にして危殆に瀕す。ただ、拙著において僭主政自体は講究の対象となさなかった。今回、僭主政を俎上に載せる所以である。前、後期に僭主政を区分する事は妥当なのであろうか。所謂前期のそれがギリシア史の構造変化に関係せしめられるか否か、これらは詳密に論究せざるべからざるものがある。⁽⁶⁾

本稿が対象とするのは「前期僭主政」中、コリントスにおけるキュプセリガイの支配である。キュプセロスによる権力掌握の事情、その支持層、キュプセロスやペリアンドロスの政策等から、僭主政前後の体制にまで論及する。その間、コリントス社会は深甚なる社会変動を蒙ったのであろうか。僭主の政策はどのような方向性を取ったのであろうか。

もとより、史料の現状に鑑るにこの事は著しく困難な課題である。全般に「前期僭主政」に関する史料は鮮少を極めるのであるが、その上それらの中には紋切型僭主像に由縁するものが包含される。史料の信憑性をめぐって判断を下すのは容易ならざるところである。従って、「前期僭主」中、幾何なりとも論じ得るのはアテナイのペイストラティダイを別とすると、纔にコリントスを算える程度である。コリントスに関しても、以下の行論において示される如く、茫漠たる要素が著大である。

註

(1) 年代は伝統的なものに導う。キュプセロスの統治は六五七／六―六二七／六、ペリアンドロスは六二七／六―五八七／六、プサンメティコスは一五八七／六―五八四／三年。この問題については J. Servais, *Hérodote et la chronologie des Cypselides*, AC 38, 1969, 28-81. cf. E. Will, *Korinthiaka*, Paris 1955, 363-440.

(2) シュラクサイにおけるゲロンなどデイノメノス家の支配は以下に叙する通説的説明より除外される事少なしとしない(例えば清水昭次「前期僭主政と過渡期のポリス社会」、『世界の歴史』四、筑摩書房、一九六一、四六ページ。同「貴族政の発展と僭主政の出現」、岩波講座世界歴史一、一九六九、四七九ページ)。この事は既にして在来説の欠陥を示すものである。

(3) 「前期僭主政と過渡期のポリス社会」三五―五九ページ。「古典古代における貴族の特質―ギリシア・ポリス社会―」、『歴史教育』十一卷八号、

一九六三、一〇一—一六ページ。「貴族政の発展と僭主政の出現」四七九—四八五ページ。

- (4) 貴族政から民主政へという「発展のいわば必然性の中にあつては、僭主による一人支配の原理の追求は、要するに一つのアナクロニズムにすぎず、民主政の誕生を準備するという歴史的役割を果たしたのは、挫折するように初めから運命づけられていたのである。」(清永「貴族政の発展と僭主政の出現」四八四ページ)。

(5) 晃洋書房、二〇〇三。

- (6) 古人にはこれらの理論は無縁である。この点、注意を喚起しておく。アリストテレスと政体の遷移に関しては、芝川、前掲書第一部。

一

コリントスにおける当初の政体は王政であつた。次いでバッキアダイの支配に移行した。キュプセロスが顛覆したのはこの体制であるが、然らばそれは如何なるものだったのか。この一門は同族間にて婚姻を取結び、二百人を踰える者が共同にて統治し、連年一人のプリュタニスを立て、その支配は九十年に及んだと伝えられる。⁽¹⁾ 学説史においてこの支配は、通例、貴族政と称される。バッキアダイは時にゲノス(「氏族」と呼称される。⁽²⁾ 然るに、それらの主張は史料を精査した結果ではない。ギリシアにおいて王政に続くのは貴族政が通則なりという、論拠はただそのみに尽く。ゲノス云々に至つては過去の亡霊である。それを閉鎖的貴族集団と等置するのはブリオ以降の今日、容認されぬところである。⁽³⁾

バッキアダイにつき参考を供する史料としてはダマスクスのニコラオス⁽⁴⁾がある。これによればキュプセロスは大衆(dēthnos)の間にて人気を博し、政権を略取せんとしてそれを煽動した。最終的にコリントスの民衆(demos)は彼を王として立てたとの由である。コリントスに自由なる民衆、大衆が存し、それが政治を左右したとの筆致である。然るに、ニコラオスには古期と後世の政治を区別せずに叙する傾きがある。アルカイク期における政治の様態をそれ自体として弁えぬ懼れがある。吾人としてもニコラオス以外の史料を重用せざるを得ないものがある。

アリストテレス『政治学』であるが、これによると往時の僭主には民衆指導者より発するものが少なしとはしない。それらは有力者に敵

対して民衆の信頼を贏得、然して僭主の地位に就いたとするのである。⁽⁵⁾ その例として五卷十章においてはレオンティノイのパナイティオス、アテナイのペイシストラトス、シュラクサイのディオニュシオスと共にコリントスのキュプセロス、その名を挙げられる。⁽⁶⁾ 五卷五章にて例示されるのはペイシストラトス、ディオニュシオスと共にメガラのテアゲネスである。⁽⁷⁾

これら両箇所は事実関係、『政治学』全体との関連等、夥多の難点を内包する。さりながら、アリストテレスの思考において、古期に自由なる民衆が存し、それが無視し難き政治勢力である事は明白である。⁽⁸⁾ この点、アテナイ、メガラについてはそれぞれソロン、テオグニスという同時代史料より裏書される。⁽⁹⁾ そうすれば、ディオニュシオス⁽¹⁰⁾はもとより、ペイシストラトスやテアゲネスが民衆の支持に依拠して抬頭したのは事実となすべきである。従って、キュプセロスに関してもアリストテレスの証言は擯斥すべきではない。⁽¹¹⁾ 該時期のコリントスは民衆煽動が奏功し得る情況にあつたと見られる。自由なる民衆の意向が政治的に一定の比重を占めていたのである。⁽¹²⁾

『政治学』には更に考量すべき条がある。それはペイドンの立法である。「だからコリントスのペイドンは、これは大昔の立法家たちの一人だが、家と国民の数とは、たとい初めにその凡ての国民が大ききの不当な割当地を持った場合でも、常に等しいままでなくてはならないと考へた。」⁽¹³⁾ この意味するところ何たるか、その判知は容易ならざるところである。ただ、『政治学』の字句よりすると、家と市民の数が一定不変たるべきを規定したものであろうか。⁽¹⁴⁾ これは『政治学』においてプラトン『法律』との関連にて述べられた箇所である。『法律』においては国民の窮迫防止は覚束なく、従って国家の安寧は計り難いが、ペイドンの法律にては然らずとの事であらう。そうすれば、ペイドンの立法意図はその方面にありとアリストテレスとしては観じたのであろう。⁽¹⁵⁾

ペイドンについては素姓、年代共に不明である。ただ、その立法が僭主政期になされたのであれば、それは僭主の名を冠されたのではなからうか。ペイドンは「最古の立法家の一人」とされている事でもあるし、その立法がバックシアダイの支配下にてなされた蓋然性低しとしない。⁽¹⁶⁾ 立法意図に関してもアリストテレスの見解が正鵠を射るか否か定かではない。当時、市民権の規定も明確ではなかったであらう。ただ、割当地^{クレイロス}の規模が不等とされていた。そうすればこの法律は富裕者と共に然らざる者の存在を証す事となる。少量のクレイロスのみを保持する零細農民も共同体の一員として遇された事を意味するものとならう。⁽¹⁷⁾

以上よりしても当時のコリントス社会の実相は如何であらうか。それを支配身分擅権を揮い、平民がそれに従属する閉鎖社会と断ずる事

には異議を呈せざるを得ない。バツキアダイの支配とはヘロドトスも明記する⁽¹⁸⁾ように寡頭政なのである。既往のように、そうした特定の家系⁽¹⁹⁾が、偶々、政権を独占したのである。その上、その運用が放肆に流れるとの事故、それはアリストテレス的用語を以ってすれば閥族政である⁽²⁰⁾。これは寡頭政の鞏度なる形態であつて、暴政とされるものである。

デルポイにてキュプセロスの父エエティオンに下されたという託宣は以下の如し。

エエティオンよ、いと崇めらるべき身にてありながら、汝を崇むる者はあるまいぞ。

ラブダは孕りておる。やがて転がる岩を産み、

その岩は統^すぶる者ら *andrasi mounarchois* の上に落ちて、コリントスを懲らしめよ⁽²¹⁾ぞ *dikaiosei*。

この神託はキュプセロスが政権を奪取して後に作成されたのであろうが、バツキアダイの暴戾なる政治を譏諷する意図が籠められる。三行の *dikaiosei* は必ずしも一義的とはしないのであろうが、バツキアダイに対する懲罰をも意味する。 *mounarchois* なる表現もバツキアダイが一族のみにて権力を私する事を諷するものであろう。バツキアダイは僭主として統治す *tyrannentes* とストラボン⁽²⁴⁾が記すのもその関連においてであらう。アリストテレスの説くところによれば、閥族政は僭主政に接近する政体であつた。

キュプセロスの母はラブダ。これはバツキアダイの出であるが、蹇足なるが故、一門にては娶る者がなかつた。そのためにこれはエエティオンなる者に与えられたという。この人物はカイネウスの後裔にして先祖はラピタイ族に遡ると伝えられる⁽²⁵⁾。これはもとより神話上の一族であるから、その種の伝承には信を置く能わざるものがある。上記の神託第一行において、エエティオンに敬意を払う者皆無とある。この事は彼の平凡卑賤を示唆する可能性⁽²⁶⁾がある。不具とは雖も、バツキアダイは一門の娘をそのような者に与えたのである。キュプセロスの出生譚並びにその救難に関してはこれを寓話⁽²⁷⁾として斥けるより他はない。権力略取に至るまでの過程を精細に辿るのは不可能である⁽²⁸⁾。ニコラオスによれば、キュプセロスはコリントスにてポレマルコスに就任し、これを上昇の楨杆としたとの事である⁽²⁹⁾。

註

(1) Hdt. V. 92g 1 及び Diod. Sic. VII. 9. 6.

- (2) E. g. Will, *Korinthiaka*, 298; S. I. Oost, Cypselus the Bacchiad, *CP* 67, 1972, *passim*.
- (3) 芝川、前掲書補論。
- (4) F57 (Jacoby).
- (5) *Pol.* V. 5, V. 10.
- (6) *Ibid.* 1310b29-31.
- (7) *Ibid.* 1305a23-26.
- (8) 芝川、前掲書第一部。
- (9) 同右第二部。
- (10) テイオニュシオスは古期には属さない。
- (11) L. de Libero, *Die archaische Tyrannis*, Stuttgart 1996, 140-141. テ・リペロ流の方法では古人の証言を悉皆否認しなければならなくなる。惟つに、権力を志向する者は凡ゆる手段を尽くすのが当然である。寡頭政を打倒せんがための捷徑は民衆との結託であろう。
- (12) Cf. *Pol.* 1315b27-28. また本篇九ページ。
- (13) 1265b12-16. 日本光雄訳。
- (14) W. L. Newman, *The Politics of Aristotle II*, Oxford 1987, 271-272. cf. J. B. Salmon, *Wealthy Corinth*, Oxford 1984, 63-64; S. Link, *Landverteilung und sozialer Frieden in archaischen Griechenland, Historia, Einzelschriften* 69, Stuttgart 1991, 49-54; K. -J. Hölkeskamp, *Schiedsrichter, Gesetzgeber und Gesetzgebung in archaischen Griechenland, Historia, Einzelschriften* 131, Stuttgart 1999, 150-157.
- (15) ヒロラオスの立法を参照された。 *Pol.* 1274b1-5.
- (16) ヒロラオスはバンキアタイの一員であった。 *Pol.* 1274a32-33.
- (17) Cf. Will, *Korinthiaka*, 317-319. クレーロスを有さない者は如何相成ったのであろうか。
- (18) V. 92g 1.
- (19) ストラボン (Ⅷ. 6. 20) の表現ではバンキアタイは plousioi kai polloi kai genos lamproi。これはもとより身分的含意を欠く。
- (20) 芝川、前掲書四二一四四ページ。
- (21) Hdt. V. 92g 2. 松平千秋訳。ただし一部改変。
- (22) Cf. W. den Boer, The Delphic Oracle concerning Cypselus, *Mnemosyne* Ser. 4, 10, 1957, 339; Will, *Korinthiaka*, 450-451.
- (23) monarchos の種の用例をめぐって cf. Alkaios, F6. 27; Solon, F12. 3 (G. -P.); Theogn. 52.
- (24) Ⅷ. 6. 20. cf. Plut. *Mor.* 772D-773B.
- (25) Hdt. V. 92g 1. 別の伝承ではエエテイオンの祖はメラス (Pausanias, II. 4. 4, V. 18. 7)。なお、非ドーリス系云々については後述。
- (26) エエテイオン「いと崇めらるべき者」とは僭主の父なる関連にて解すべきか。

- (27) Hdt. V. 92γ-δ.
(28) ニコロオス F57.4-6 は信に値すか、定かでない。
(29) もしこれが事実とする (Will, *Korinthiaka*, 461-462, 475-476) ならば、バックアダイ政権下、父を卑しくする者とても顯職に就くを得た事となる。この点、貴賤に関し当時の觀念を測知する上で益なしとはしない。

二

キュプセロスの支持層であるが、これをめぐっても種々の解釈が呈示されてきた。ここで、学説を簡単に整理しておこう。先ず、種族關係を重視するものがある。コリントスにおいてはバックアダイなるドーリス系貴族が支配したが、それに対して抑圧された先住民が蹶然として起ったものである。かくなる見解に論拠を提供したものであることはシキュオンのクレイステネスによる部族制改革⁽¹⁾がある。これはドーリス系に対する被圧迫民の捲返しを意味するものであるが、その種の解釈は頗る疑わしい。更に、一般的に、ドーリス系ギリシア人とイオニア系、或はその他を画然として區別するのは学説史において旧くより行われる。ドーリス族は夙にその種族的一体性を確立し、永くそれを保持した。暗黒時代に移動を繰返した後、ペロポネソスに定住して支配した⁽²⁾が、そのようなドーリス族に対する反抗、これによつて僭主政の多くは解明するを得るというものである。

コリントスに関してもこの種の学説は跡を断たぬ⁽³⁾が、決定的なのはそれを語る史料が欠如する事、これである。キュプセロスの父系をめぐる伝承には信憑性に問題があつた⁽⁴⁾。それが原住民系に属するとは臆断を下し難い。コリントスにおいてドーリス族と先住民との間に軋轢があつたか、その蹤跡は定かとはしない。この点、神話に史実の反映を認める事には些少な疑問が生じる⁽⁵⁾。また、キュプセロスの施策にも反ドーリス的傾向は見出すを得ない⁽⁶⁾。

戦術の変化も僭主政に関して主要論題の一つをなしてきた。序においても一瞥したように、七世紀において重装歩兵戦術が採用され、その結果、中流農民の発言権が増大を見たとされてきた。学説史においてはそれらが僭主の支持層を構成したとも主張されてきたのであつた⁽⁷⁾。

コリントスに関しても、重装歩兵がキュプセロスを支持したなどと唱道された事がある⁽⁸⁾。さりながら、重装歩兵が特定の人物を僭主として推す如き事態が生じ得るであろうか。ポリスには常備軍は存しない。彼らは重装歩兵たる前に共同体の一員である。そうすれば、兵士の主軸をなす中流農民が共通の不満を抱懷していたのであろうか。例えば農業危機に見舞われて、それよりの救済を希求していたのであろうか。然るに、少なくともコリントスに関してはその種の伝承これを欠く。結局、重装歩兵の問題を僭主政の発生と直接関係せしめるのは困難であらう⁽¹⁰⁾。

更に根本的な事であるが、輓近の学説によれば、既にホメロスの時代において古典的重装歩兵戦術の先蹤が存した。当時において、庶人の軍事的役割が無視すべからざるものとなる。そうすると、七世紀において戦術の変化に伴って顯著なる社会的、政治的変動が生起したなどとする主張には賛意を表し難くなる⁽¹¹⁾。

経済的要因を前面に据えるのはユア⁽¹²⁾であった。これによれば七から六世紀にかけてのギリシアにおいては経済が大発展を遂げ、商工業家層が興隆した。これを後景としたのが前期僭主であつて、これらは土地貴族を圧倒し、商工業の殷賑に尽瘁した。こうしたユアの説であるが、これは一般の支持は受けない⁽¹³⁾。ギリシア経済を過度に近代化して解した故である⁽¹⁴⁾。コリントスの場合も、取分けバツキアダイの時期は経済規模小にして、キュプセロスの支持者として産業家層を想定するのは不適切である⁽¹⁵⁾。

キュプセロスの成功であるが、究竟するに、種々の要因が複合した結果であらう。バツキアダイの失政に対する不満が醸成されていたのであろう。その中には対外関係における蹉跌⁽¹⁶⁾も包含されていたかもしれぬ。しかしながら、殊に内政に関して不満が鬱積していたのである。前節に掲げた神託よりしても、バツキアダイには権力濫用が甚しかったと揣測される。ニコラオスによれば、キュプセロスはポレマルコスとしての職権行使において一般の人氣を博したのであつた⁽¹⁷⁾。その細部は別として、彼が国民多数を糾合してバツキアダイを打倒したの⁽¹⁸⁾は事実となすべきであらう。この時期のコリントスにおいてその種の政治行動は当然可能であつた⁽¹⁹⁾。キュプセロスはバツキアダイによる暴政の対極として自らを宣揚したと史料される。

畢竟、キュプセロスのクーデタは日常的次元を大きく出ずるものではない。ギリシアのポリスとはその本質よりしても国制変革が頻々として生ずるのである⁽²⁰⁾。寡頭政の解体など特筆大書する程の事件でもないわけである⁽²¹⁾。

註

- (1) この問題に関する史料は Hdt. V. 67-68 である。この箇所はアテナイのクレイステネス改革を語る途次それに触発された形で唐突になされた逸脱である。アテナイのクレイステネスによる部族制改革はシキュオンにおける同名者のそれを模倣したのであろうとの事であるが、この間のヘロドトスの記述は荒唐無稽としか評し得ない(芝川、前掲書二五九—二六二ページ)。従って、五卷六七—六八に対しても百般の疑問が奔出する。cf. J. Ducat, *Clisthène, le porc et l'âne*, *DHA* 2, 1976, 362.
- くローテス以外の史料として Polux, III.83, VII.68 等。これらを含める諸問題については差野の Will, *Tyrannis und Stammesbewußtsein*, K. H. Kinzl (Hrsg.), *Die ältere Tyrannis bis zu den Perserkriegen*, Darmstadt 1979, 130-160 (*Doriens et Ioniens*, Strasbourg 1956). 以下「節註」。
- (2) これらの点は後述。
- (3) 一例として D. E. W. Wormell, *Studies in Greek Tyranny* I. The Cypselids, *Hermathena* 66, 1945, 4 を挙げよう。
- (4) 六ページ。
- (5) Cf. J. M. Hall, *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge 1997, 83 他。
- (6) 部族改革は後述。キュプロス人がバッキアタイを追放したのはそれが政敵たるため、ドーリス族なるが故ではない。
- (7) E. g. A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, New York and Evanston 1963, 34-38.
- (8) G. Forrest, *The Emergence of Greek Democracy*, London 1966, 112-114.
- (9) その事は傭兵隊長の類を想定しなければ不可能であらう。cf. R. Drews, *The First Tyrants in Greece*, *Historia* 21, 1972, 132-134. Hdt. V. 92e1 の *epecheirese* は軍事力行使を示唆するものではない。ニコラオス (F57.6) にもその種の観念は無縁である。
- (10) *Ar. Pol.* 1297b16-28 は僭主と特定の兵種との関係を指定するものではなかった。id. 1305a7-28 は僭主政を企てる者は戦功を挙げて大衆の人気を博したとの意。
- (11) 芝川、前掲書二二三—二三四ページ。
- (12) P. N. Ure, *The Origin of Tyranny*, Cambridge 1922 (Reprint. New York 1962); id. *Der Ursprung der Tyrannis*, Kinzl, *op. cit.* 5-23 (*The Origin of the Tyrannis*, *JHS* 26, 1926).
- (13) ニルソン (M. P. Nilsson, *Das Zeitalter der älteren griechischen Tyrannen*, Kinzl, *op. cit.* 88-89 (*The Age of the Early Greek Tyrants*, Belfast 1936)) もユア説に近きものあり。ただ、これは困難せる労働者を支持基盤として僭主が勃興したとする。
- (14) 本稿の序、二ページを参照。
- (15) ヴィル (*Korinthiaka*, 427) によれば六二〇年頃、コリントスは経済的難局に陥って、それが僭主政の発生に繋った。(ヴィルは僭主政開始を六二〇年頃に置くのであった。)
- (16) ケルキュラ戦 (*Thuk.* I. 13. 4) 或はアルゴスとの関係 (Nikolaos, F35) を挙げる向きもある。

- (17) 本論文六ページ。
 (18) *Ar. Pol.* 1315b28; *Heraclid. Lemb. Exc. pol.* 20; *Nikolaos*, F57. 8 によればキュプセロスは護衛兵を帯びなかった。この事も彼に対する一般の支持を物語るものであろう。
 (19) 本篇五ページ。
 (20) 芝川、前掲書、二四—二五ページ。
 (21) 僭主政成立を本稿序論に述べたギリシア史の構造的変革なる角度より解明せんとするのは、事、コリントスに関しては至難であらう。

二

1

僭主の施策に移る。ヘロドトスの語るところでは、キュプセロスは多数を追放、殺害し、また財産を没収した。他方、ニコラオスはキュプセロスを穏和とする⁽²⁾。バックシアダイを放逐してその財産を没収し、不穏分子を植民地に移したと叙するのみ。これに関してであるが、バックシアダイの亡命者がスパルタに在住したとの所伝がある⁽⁴⁾。爾他の地にもバックシアダイ亡命の証跡若干認められる⁽⁵⁾。これによって観れば、誅殺されたのは当時「王位」にあったパトロクレイデス（ヒッポクレイデス）程度のみであらうか。キュプセロスの嗣子ペリアンドロスは殺戮を実施したと見られる⁽⁶⁾。その対象は主として有力者（*hyperchoi*）であらうが、それらはキュプセロスの治世を生延びたのであろう⁽⁷⁾。キュプセロスは護衛兵を帯びずと伝承されるのであつた⁽⁸⁾、比較的穏和な政治を布いたと断すべきであらう。ヘロドトス五卷九二はコリントス人ソクレスの演説であつて、これには僭主政の害毒を聴衆に刻印する必要があつた。その面よりの誇張がなされたのであろう。

財産没収にしても対象となつたのは主としてバックシアダイか。この点一つ留心すべきはキュプセロスによる植民地開設である。彼はレウカス、アナクトリオン、アンブラキアを植民地として開いたとされる⁽⁹⁾。それらは農業を主目的の一つとするものであつて、コリントス人にとっては土地の取得が植民の動機と推察される。そうすれば、本国にて人口過剰、土地不足の傾きがあつた事になる。キュプセロスとしても、上流富裕者より広汎に土地を掠奪して貧民に分与するが如き所為には奔らなかつたのであろう⁽¹⁰⁾。

キュプセロスはバッキアダイ治下追放された者を召還したといふ⁽¹⁾。それらは叛徒の疑を蒙って流謫の身にあつたとするならば、その中には有力者が多数を算えたであろう。然らばキュプセロスはそれらに対して宥和的だった事になる。僭主にとって至高の目的は自らの地位を維持する事である。自らを支持する者であれば階層の如何を問わず親和を保つく努めるものである⁽¹²⁾。僭主よりして社会的變動を惹起すべき理由はこれを欠く⁽¹³⁾。

2

ペリアンドロスは有力者 (hyperchoi) を多数誅戮したとの由であつた⁽¹⁴⁾。彼はまた護衛兵を設置したとされるが、彼の下、反抗の機運が増大したのであろう。その事は二代目僭主として宿命的なものでもあつたろう。ただ、この間、ヘロドトスなどの記述には誇張も垣間見られる⁽¹⁶⁾。ペリアンドロスは反抗の中枢をなす要人を処置したとの事か。上流階級をそれ自体として敵視したのではないと思考される。

ペリアンドロスに関し、各種の方策が伝えられる。奴隷取得禁止や怠惰抑制、都市在住や奢侈抑止、淫売婦敵視、boule epi eschaton 設置や奉獻である。これらはヘロドトスにはなく、後代の史料にのみ見出すを得る⁽¹⁷⁾。加之、これらにはアリストテレスが僭主政保持策として列記する諸処置と通ずるものがある⁽¹⁸⁾。従つて、これらを四世紀の僭主政論に由縁するトposとして、その史料的价值を否認せんとする向きもある⁽¹⁹⁾。

奴隷取得禁止令⁽²⁰⁾より入るが、これはギリシアにおいて稀有の事例に属す⁽²¹⁾。それだけに却つてこの件に関する史料は信に値するものとなるかもしれない。これについて纏つた形で論じた者にヴィル⁽²²⁾がいる。彼によるならば、この法令は奴隷労働から自由農民を保護せんとして發布された。しかしながら、これも明瞭ならざる部分余りにも多しとする。コリントスにおける農村の状況など皆目不明なのである⁽²³⁾。

他にも各種の意見散見される。中には自由人のために雇傭を確保せんとするためというものもある⁽²⁴⁾。また、ペリアンドロスの胸底にあつたのは貴族層の豪奢を制約する事との説もある如し⁽²⁵⁾。或は、古人としては奴隷取得禁止令を奢侈や怠惰また市内居住抑制と共に挙げるのであつた⁽²⁶⁾。それらに関連せしめる事が適切なものかもしれない。独裁者としては市民をして自ら労働に励んで閑暇なからしめ、以つて陰謀、叛乱を抑止せんとしたのであろうか⁽²⁷⁾。ただ、この法令は奴隷所有一切を禁止せんとする体ではない。それが奴隷の新規取得のみを制限せんとする⁽²⁸⁾のであれば、その実際の効力は如何程のものであつたろうか。この法令に関して如何なる解釈を採るにせよ、その事は念頭に懸けるべ

きである。何れにせよ、これに関してコリントスの階層関係を推窮するのは困難至極である。例の通り、材料僅少に過ぎるのである。況んや、「貴族—平民」関係で以ってそれを断ずるのは想像力の所産である。⁽²⁹⁾

奢侈禁止や怠惰抑制は相即するものである。⁽³⁰⁾これらはアルカイク期の他のポリスにおいても知られる故、ペリアンドロスに關しても異とするには足りない。これらの方策が平等主義的傾向を帶ぶと解する向きもある。⁽³¹⁾「貴族」の贅沢や遊逸を白眼視して、彼らを「平民」と同一の地平に立たしめんとする意図が包含されとの事である。さりながら、前古典期においてこれと類似の法を定めたのは、豪奢に關してはソロン⁽³²⁾、ピタコス⁽³³⁾等である。無為に關する法はアテナイその他にもあつた。⁽³⁴⁾このうち、ピタコスは必ずしも民主派的傾向にあるものではない。⁽³⁵⁾スパルタやアテナイにおける立法もその方面よりものとなすのは問題少なしとしない。遠く四世紀末においても、パレロンのデメトリオスの如き寡頭派が華美禁止令を發布している。⁽³⁶⁾これによつて觀れば、これらの立法に關してその原由はポリスの本質に求めるべきではないか。ポリスに於ては所謂市民道德が優勢で、「貴族」もその中に統合されていた。⁽³⁷⁾上記の諸法令、民主化への胎動に棹さすとなし難き事は確信し得る。⁽³⁸⁾現にコリントスは僭主没落後、寡頭政に復したのみ。民主政体出現するには遙か後、四世紀を俟たなければならぬ。

市部居住の問題であるが、史料の語るところ、ペリアンドロスとしてはそれに制約を加えたとの意であらう。ペイシストラトスに關しては勸農政策は史実として承認すべきである。これは一つには農民の生活を配慮したものであるが、他面、市民の非政治化を企図したものであつた。人々が田園に散在して仕事に没頭し、中心市に來つて国事に参与するのを防止する、これもまたアテナイの僭主の意図であつた。⁽⁴⁰⁾他にケパレニア⁽⁴¹⁾などについても類似の策は伝えられるものであるし、ペリアンドロスが同様の術策を弄したとしても不自然とはしない。もとよりこれは僭主政護持策の一環である。ここからして當時の階層關係につき臆度をめぐらすのは慎むべきである。⁽⁴³⁾

キュプセリダイの奉獻物や建設工事であるが、前者に關してはキュプセロスのそれが知られる。デルポイの宝物庫がそれである。⁽⁴⁴⁾オリュンピアのゼウス像も僭主一族の手になるものであらう。ペリアンドロスに關しては神殿建築やディオオルコスが歸せられるか。アリストテレスの主張するところでは、キュプセロス一族の獻納物は被支配者を窮乏させ、かつ仕事に忙殺せしめて謀反の遑なからしめるのを目的とする。されど、その点如何であらうか。奉獻や神殿建築は自らの威信を高めるものであるから、僭主として手懸けるのは当然至極である。レ

カイオン港やディオルコス建設はコリントスの発展を計るものであるから、一国の支配者としてこれまた当然の行為である。⁽⁴⁶⁾

3

部族の問題に移る。コリントスの部族は曖々然たりと言う他はないが、それでも幾何かの史料は遺されている。先ずスーダ⁽⁴⁷⁾。「アレテス、神託に遵いてコリントス人を集住せしめ、市民を八部族に、ポリスを八箇の部分になせし」云々。アレテスとはコリントスの建国者にして初代の王とされる。これ自身伝説的である。シュノイキスモスについても、アレテスなる人物がそれをなさしめたか、疑問少なしとはいえない。コリントスにおいて他に集住に関する伝承は聞見しないところである。他に、スーダの章句は「部分」とは何かなど多々問題を生ず。ただ、八部族制が古期に制定された旨、それは確言する。その上、それが改廃を経ずに後期迄持続した事をスーダは含意するか。その点は必ずしも然らずとなすべきである。

僭主政打倒後の時点であるが、ニコラオス (F60.2) の語るところでは autos de parachrema estrateusato politeian toiande mian men oktada proboulon epioiesen, ek de ton loipon boulen katelexen andron θ. これはテキストが潰乱する故、意味が了解し難い。oktas (八名) なども判然としない。ただ、ここには八部族制を想出せしめるものはある。学説史においては、これは八部族制と関係づけて論ぜられるのが通常である。ここではヴィル⁽⁴⁸⁾に遵って以下の訳を掲げておく。「直ちにコリントスのデーモス、以下の国制を建てし。八名の先議役 probouloi を作り、残余より一部族各九名の評議會を選出せし」⁽⁴⁹⁾先議役は八部族より各一名、評議員は八部族で計七十二名、それと先議役を合算すれば八十人となるのであろう。もしもこの解釈が的確を離れる事遠からずとするならば、五八四／三年当時、コリントスには八部族が存した事になる。

在来説であるが、それは八部族を最古期には設定しない。その点において早くもスーダとは齟齬を来すのである。従来、八部族には先行形態を措定するのが通常であった。それは即ちドーリス系三部族である。先にも少々触れたが、旧くより他から画然と区別されるドーリス族が三部族に別れて移動したとの事である。デュマネス、ヒュツレイス、パンピュロイの三部族は悠遠の昔に迄遡る氏族制的機構であるが、ドーリス族定住後も保持された。コリントスもその撰に洩れぬというわけで、八部族はそれを改廃したものとされる。その際、地縁的原理に依拠したというわけである。改廃の時期は論者によってバツキアダイ統治下、⁽⁵⁰⁾僭主政期、⁽⁵¹⁾若しくはその倒壊後に設定される。⁽⁵²⁾⁽⁵³⁾

ところで、民族、種族とは永劫に渝らぬ実体なのであろうか。数百年に亘って自己の純血を固持し、血縁的下部組織を固守した集団は絶海の孤島においては存するを得るであらう。事は大陸、しかも混乱と移動の時代である。ドーリス族といつても、本来、雑多な集団ではなからうか。それが更に異分子を糾合し、或は一部分離していったのではなからうか。定着した後も原住民との融合が生じたのであろう。⁽⁵⁴⁾ドーリス族という意識が高まったのは後世に至つての事ではないか。所謂ドーリス族の三部族名も本来的なものではなく、後に拡散したのであろう。⁽⁵⁶⁾

一般に部族はポリスが発達した地において初めて確認される。⁽⁵⁷⁾それは氏族制的機構などではないのである。その点においてそれはプラトリア、ゲノスと同様である。この点、旧学説とは訣別すべきである。部族、プラトリアといった氏族制的集団が古期においては強盛を誇っていたが、ポリスの発達に伴つて衰滅したなどという観念は抛擲すべきである。ましてや、それらが貴族の支配装置の如きものであつて、それらにおいて平民が従属したなどという図像は虚妄である。⁽⁵⁸⁾

ここで、本来の論題に戻るが、コリントス史の当初に血縁的部族を措定するのは誤謬と目すべきである。従つて、それが八部族制に移行したとか、或は血縁から地縁⁽⁵⁹⁾への転換、また貴族の特権縮減などといった事を主張するのは無意味である。アルカイク期のコリントスにおいて部族改革がなされたかも史料の上では亮然とはしないのである。前記のスーダやニコラオスはそれを証するものではなかった。

デロスより出土した碑文（大略三二五—二七五年）がコリントス人の決議とするならば、⁽⁶¹⁾その中にはコリントスの部族の事が録される。二五行の *archaias* が同じ行の *phylas* に関係するとするならば、それは当該時期において、現行部族制とは別箇の旧部族が存した事を証するものとなる。それは概略三百年頃、生命力を保持するが如きであるから、旧部族制が改廃されたのはその時点を遡る事さほど遠からずとならう。それは四世紀、或はせいぜい五世紀後半とならうか。これはコリントスにおいて確度高き部族改革である。

コリントスの部族に関してはそれに下位区分が認められる。中にはそれを三箇として、アテナイ十部族におけるようなトリッテュス制をコリントスに想定せんとする向きもある。⁽⁶³⁾或は、それとは別に、デロス出土の碑文に現れる *hemiochoon* や *triakas* を部族の下位区分とする説もある。⁽⁶⁴⁾然るに、それらの主張には疑点なしとはいへないし、それらの制定年代が不明なのである。それらから如何なる歴史的意味を抽出するかは本稿の趣旨よりしても沙汰の限りでない。

註

- (1) V. 92ε 2.
- (2) F57. 8.
- (3) demeuein なる語句に問題はあるが。
- (4) Plut. *Lys.* 1. 2.
- (5) H. Berve, *Die Tyrannis bei den Griechen*, München 1967, 523.
- (6) Hdt. V. 92ζ-η 1. なお、一二ページ。
- (7) *Ibid.* V. 92η 1.
- (8) 一二節註 (18)°。
- (9) Nikolaos, F57. 8; Strabon, X. 2. 8 他。キュアセロスが開設した植民地は他にもあったか。cf. Will, *Korinthiaka*, 520; Berve, *op. cit.* 524.
- (10) Cf. H. Brandt, Γῆς ἀναθασμός und ältere Tyrannis, *Chiron* 19, 1989, 210. ペリアントロスもキュアセロスと同様であろう。
- (11) Nikolaos, F57.7.
- (12) ペイシストラトスを想出せよ。芝川、前掲書一二二ページ。
- (13) [アリストテレス]『経済学』二卷二章劈頭にはキュアセロスによるコリントス人の財産よりの献納の記事がある。ファン・フローニンゲン (B. A. van Groningen, *Aristote, Le second livre de l'Économique*, Leiden 1933 (Reprint. New York 1979), 51-52) によれば、これには貴族層弱体化の企図がある。しかし、それは然らずとなすべきである。『経済学』の記事は胡乱なのである。本文にも記したように、そもそも債主として特定の階層を迫害して摩擦を生ずるのは無用の策である。
- (14) 前述、一二ページ。
- (15) Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 20.; Nikolaos, F58. 1.
- (16) ペリアントロスには穏和なる一面もあった。cf. Salmon, *op. cit.* 197-198.
- (17) 最後のもののみ Ar. *Pol.* 1313b22-23° cf. [Ar.] *Oec.* II. 1. 1; *Suda*, s. v. Kypselidon anathema en Olympia. 他は Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 20; Nikolaos, F58.1.
- (18) 現実には共通するものは存外少ない。『政治学』五卷十一章参照。
- (19) De Libero, *op. cit.* 156-159.
- (20) Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 20; Nikolaos, F58. 1.
- (21) O. Picard, Périandre et l'interdiction d'acquérir des esclaves, *Aux origines de l'hellénisme. La Crète et la Grèce. Hommage à van Effenterre*, Paris 1984, 187-188.
- (22) Will, *Korinthiaka*, 510-512.

- (23) 例えば、ソロン改革前夜のアテナイにおける如き中小農民の没落、債務奴隷化の進行をコリントスにも推定し得るのであろうか。九ページ参照。
- (24) Wormell, *op. cit.* 8. cf. Ure, *The Origin of Tyranny*, 192.
- (25) Cf. De Libero, *op. cit.*, 159 Anm. 119.
- (26) 本節註例。
- (27) Cf. A. R. Burn, *The Lyric Age of Greece*, London 1960, 191-192.
- (28) 如上のニコラオスには ktasthai とある。
- (29) 清永「ペリアンドロスの奴隷取得禁止令」(『歴史学研究』一九四、一九六四年) 一一二二ページ。
- (30) 売春婦に関しても同様。ペリアンドロスは全女術を海中に投ぜしめたとの事である (Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 20)。しかしこれは誇張であろう。boule epi eschaton の設置ももし事実とするならば同一の線上に置かれる事となる。この会議は収入以上の生活を許さずとの事である。
- (31) Will, *Korinthiaka*, 513-515. cf. Berve, *op. cit.* 22-23.
- (32) Plut. *Solon* 21. 4-5.
- (33) Cicero, *De legibus* II.66. スペルタに関しては Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 13. 真偽は別として類似の法はザレウコス等々に帰せられる。埋葬に関する華美取締をめぐっては J. Engels, *Funerum sepulcrorumque magnificentia*, *Hermes*, Einzelschriften 78, Stuttgart 1998.
- (34) Thalheim, 'Αργίας γραφή, RE I 2, 1895, 717. アテナイにおけるこの種の法の制定はドラコン、ソロン或はペイシストラトスに帰せられる。
- (35) 芝川、前掲書六章。
- (36) Cicero, *loc. cit.*
- (37) 芝川、前掲書七章。
- (38) なお、本稿二二ページ。
- (39) Ephoros, F179 (Jacoby); Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 20.
- (40) 芝川、前掲書二二二―二二三ページ。
- (41) Heraclid. *Lemb. Exc. pol.* 64. ただ、この一件、年代は不明である。
- (42) その他シキエオンなどについては Pollux, VII. 68; Theopomp. F311 (Jacoby)。ただ、これらの史料的価値に問題はある。
- (43) Cf. Fr. Schachermeyr, Periandros, RE X IX 1, 1937, 714-715.
- (44) Hdt. I. 14. 2; Plut. *Mor.* 164A, 400D-F.
- (45) *Pol.* 1313b18-25.
- (46) syssitia や hetairia をめぐっては cf. Will, Tyrannis und Stammesbewußtsein, 132-133; id. *Korinthiaka*, 507 n. 2. syssitia や hetairia は必ずしも貴族的組織ではない。デイオニソス祭祀については論及の要もない。これの政治的性格は明瞭でない故。
- (47) S. v. Panta okto. (「万事八箇」) hoi de, hoti Aletes kata chresmon tous Korinthious synoikizon okto phylas epoiese tous politas kai okto

mere ten polin.

- (48) *Korinthiaka*, 612-615.
- (49) Cf. N. F. Jones, The Civic Organization of Corinth, *TAPA* 110, 1980, 185 n. 28.
- (50) C. Roebuck, Some Aspects of Organization in Corinth, *Economy and Society in the Early Greek World*, Chicago 1983 (*Hesperia* 41, 1972), 115-116.
- (51) Salmon, *op. cit.* 206-207; Jones, *op. cit.* 187-188.
- (52) G. Busolt, *Griechische Staatskunde* I, München 1920, 363 Anm. 4.
- (53) Cf. S. Dow, Corinthiaca, *HSCP* 53, 1942, 103-105.
- (54) Pollux, III. 83 の metaxy eleutheron kai doulon の Argeion gymnetes, Sikyonion korynephoroi など住民の証跡は欠けてゐる。 katonakophoroi (Theopomp. F176, 311; Menaichmos, F1 (Jacoby)) など の konipodes (Plut. *Mor.* 291E) の同様。 cf. Will, Tyrannis und Stammesbewußtsein, 143; D. Lotze, *Metaxy Eleutheron kai Doulon*, Berlin 1959 (Reprint. New York 1979).
- (55) ムネム (Chr. Ulf, Griechische Ethnogenese versus Wanderungen von Stämmen und Stammstaaten, Ulf(Hrsg.), *Wege zur Genese griechischer Identität*, Berlin 1996, 260-261, 275-276) によれば古世紀頃か。神話も操作されたのであろう。
- (56) *Ibid.* 275; D. Roussel, *Tribu et cité*, Paris 1976, 221-229.
- (57) 以上はムネムの強調するところである。
- (58) 芝川、前掲書補論。
- (59) Jones, *op. cit.* 177-178; Salmon, *op. cit.* 208-209.
- (60) Jones, *op. cit.* 190.
- (61) *Ibid.* 166-172. など G. R. Stanton, The Territorial Tribes of Korinth and Phleious, *CA* 5, 1986, 148-150.
- (62) archaias phylas の語に Jones, *op. cit.* 186 は不自然である。
- (63) R. S. Stroud, Tribal Boundary Markers from Corinth, *CSCA* 1, 1968, 240-242.
- (64) Jones, *op. cit.* 179-181.

四

五八四／三年、ペリアンドロスの後継者プサンメティコスが殺害され、コリントスの僭主政はここに終焉を迎えた⁽¹⁾。爾後の体制であるが、如上のニコラオスよりすると、先議役八名と評議員が選任された事となる⁽²⁾。これらが国制の中枢に位置したかの如くである。他面、民会の活動については聞知しないことである⁽³⁾。役職に関しても知られない。先議役と評議員数が少数なるところよりすると、その国制は寡頭政となろう。

そうすると、その強度は如何なるものとなろうか。アリストテレスの基準⁽⁴⁾に徴してそれを判定すべきであるが、そのためには材料僅少に過ぎる。先議役と評議会の権限如何、それらの選出方法—如何なる者の中から如何なる者が如何なる方法によって選出するか、財産級の有無如何—任期等、全く不明である⁽⁵⁾。

註

- (1) 有能な支配者を欠くと僭主政は維持し難い。アリストテレスも指摘する (*Pol.* 1315b11-12) ように僭主政は短命なのである。コリントスにおける僭主政解体はそれが歴史的役割を果し終えたからではない (本篇の序、註(4)参照)。
- (2) 一四ページ。ニコラオスの *demos* については四ページ。僭主打倒につきスパルタの干与 (*Plut. Mor.* 859C-D) が伝えられるがこれは疑わしい。先議役と評議員はこの時点にて制定されたのであろう。
- (3) 後世においてはコリントスの民会はその存在を知られる。四二一年 (*Thuk.* V.30.5)・四世紀中葉 (*Plut. Dion* 53.4) その他。
- (4) *Pol.* IV. 14-16.
- (5) コリントスの国制につき、ピンダロス「オリュンピア十三歌」(四六四年の優勝を祝したもの) より多くを推知するのは難しい。それは「コリントスには良き秩序 *Eunomia* 住まう」(六行)と歌う。これは良き政治が布かれたのを賞讃するのみ (cf. *Salmon, op. cit.* 233-234)。良き政治というからには穩健なる政体を指示するか。然らば、コリントスの体制は穩和寡頭政となろう。しかし、それもピンダロスの祝捷歌に常套的に見られる美辞麗句 (芝川、前掲書一六八ページ) の類かもしれない。「良き秩序、正義、平和」など一種の詩的修飾に過ぎないのではないか。もつとも、その後、政体の変革少なしとするならば、五八四／三年のそれは穩和であったか。穩和なる国制の方が安定的なのである。当時、僭

主政やバツキアダイの暴政を鑑戒として、そのような国制を作成したのかもしれない。

結

結句、僭主政の前後において何が変化したのか。政体は寡頭政が回帰したのみ。社会構造の大変革があったのか。これには否と答えるしかない。僭主政期の諸事象にそれを指向するものは認め難い。その意味では、七十三年余に亘ったコリントスの僭主政は挿話に過ぎなかったのか。何れにせよ、民主政への巨大なる進行において僭主政が消し難き刻印を捺したなどとは主張し難い。序において記した如き貴族政より民主政への発展という図式にコリントスの僭主政を位置せしめるのは困難である。